永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2020年 7月

「闘争と勇気」「幸せな家族(川)」「わたしたちすべての者が…これが目的」「トマトと青じその冷製パスタ」



いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

イエスの物語

【正丸教会】

〒 368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1 電話: 0494-22-0465

【高知集会所】

〒 780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2 電話: 088-831-9535

【沖縄集会所】

〒 905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21 電話: 0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール sdarm.shomaru@gmail.com

発行日 2020年6月14日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒 368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Image on Front page; Sermon View on page 44

リバイバルを伴う改革

多くの心の中で、ほとんど霊的な命の息がないように見える。これはわたしを非常に悲しませる。わたしは、世と肉と悪魔に対する激しい戦いが維持されてこなかったのではないかと恐れる。わたしたちは半分死んだキリスト教によって、世の不信心にあずかり、その誤謬に微笑みかけながら、利己的で強欲な世の精神を声援するのであろうか。否!神の恵みによって、真理の諸原則に固く立ち、わたしたちの始めの確信を終わりまでしっかりつかもうではないか。わたしたちば熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え」なければならない(ローマ12:11)。わたしたちの主人は一人であり、キリストであられる。このお方をわたしたちは見ていなければならない。このお方からわたしたちの知恵を受けなければならない。このお方の恵みによって、わたしたちは自分の尊厳を維持し、柔和と悔悟のうちに神のみ前に立ち、世にこのお方を表すのである。

わたしたちの諸教会で説教が大いに要求されてきた。教会員は聖霊の代わり に講壇の熱弁に頼ってきた。求められず、用いられないために、彼らに与えられ てきた霊的な賜物は、衰え弱くなった。もし牧師が新しい伝道地へ出ていくので あれば、教会員は責任を負うべきであり、自分たちの能力は用いることによって 増し加わる。

神は牧師や民に霊的な弱さの重い責任を問うて、次のように言われる、「わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる。豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買い、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買いなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買いなさい」(黙示録 3:15-18)。神は霊的なリバイバルと霊的な改革を求めておられる。これが行われなければ、なまぬるい者たちはますます主にとって嫌悪を催すものとなっていき、ついにはご自分の子として認めることを拒まれるようになる。

リバイバルと改革が、聖霊の表れのもとに起こらなければならない。リバイバルと改革は二つの異なることである。リバイバルは霊的な命が新たにされること、思いと心の力がよみがえらされること、霊的死からの復活を意味する。改革は再組織、考えと理論、習慣と慣習における変化を意味する。改革は御霊のリバイバルと関連していない限り、義の良い実を結ぶことはない。リバイバルと改革はそれぞれ定められた働きをなすべきであり、この働きをなすことにおいて混ぜ合わされなければならない。

(セレクテッド・メッセーシ・1巻「16 章リバイバルへの召し」より 127, 128)

聖書の教え-現代の直理-

第17課 幸せな家族(II)

子どもの教育

家庭における子どもの教育は、幼児のときから開始されるべきです。彼らは、ゆりかごにいるときから、正しい習慣を身につけ、また訓練をうける必要があります。彼らの心は柔軟であるため、容易に印象を受けます。

「子をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない」(箴言 22:6)。

親は、その子どもの将来について責任を負っていることを忘れてはなりません。 一方、子どもたちは、心と実践によって第五条の戒めを知らなければなりません。 「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く 生きるためである」(出エジプト記 20:12)。

「子たる者よ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことである。『あなたの父と母とを敬え』。これが第一の戒めであって、…約束がそれについている」(エペソ 6:1,2)。

ときに矯正には、罰が伴います。賢明なソロモン王は次のように述べています。「むちと戒めとは知恵を与える、わがままにさせた子はその母に恥をもたらす。… あなたの子を懲らしめよ、そうすれば彼はあなたを安らかにし、またあなたの心に喜びを与える」(箴言 29:15,17)。

家庭内の実践的な宗教は極めて重要です。毎朝と毎夕、家族は集まり、神に 祈りをささげるべきです。子どもたちも、礼拝に参加すべきです。その大いなる 教育の時期に、聖書を読むことは重要不可欠です。なぜなら、それが子どもた ちの周りに防壁を築くからです。

「また幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知っている。」(テモテ第二 3:15)。

家族の輪は学校であり、そこにおいて彼らは最初にして最も永続的な教訓を 受けます。両親にとって自分自身の家庭こそ、労するべき最初の伝道の場所です。 「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がきたり、年が寄って、『わたしにはなんの楽しみもない』と言うようにならない前に」(伝道の書 12:1)。

理想的な家庭

「妻たる者よ、夫に仕えなさい。それが、主にある者にふさわしいことである。 夫たる者よ、妻を愛しなさい。つらくあたってはいけない。子たる者よ。何事に ついても両親に従いなさい。これが主に喜ばれることである。父たる者よ、子 供をいらだたせてはいけない。心がいじけるかも知れないから」(コロサイ3:18-21)。

家族は聖なる輪であり、いかなる人も侵入すべきではありません。夫と妻は、お互い重荷を負い、相手にあることを見いだすかもしれない欠点を、互いの間に秘めておくべきです。キリスト以外はだれも、結婚において何が生じているかを知るべきではありません。彼らは、何が正しく、何が間違っているかを、このお方にたずねるべきです。なぜなら、彼らはキリストに対して説明する責任を負っているからです。

幸福を得るための鍵が、次の聖句の中にあります。「すべて主をおそれ、主の道に歩む者はさいわいである。あなたは自分の手の勤労の実を食べ、幸福で、かつ安らかであろう」(詩篇 128:1,2)。

主をおそれること、主の道をあゆむこと、また自分の手の勤労の実を食べることを覚えましょう。なぜなら、これが幸福への道だからです。約束は次のように述べています、「あなたは…幸福で、かつ安らかであろう」。

夫、妻、子どもたちは自分の責任を果たすために、奮闘しなければなりません。 彼らの家庭は、地上における天のようになることができますし、もしくは、生き地 獄までに堕落することもできます。神の助言に従って歩み、あなたの家庭を幸せ なものにしましょう。

イエスが再び来臨なさるとき、多くの信仰深い両親たちが、自分の子どもたちを主へ連れて行くでしょう。彼らは、彼らの不断の努力と辛抱強い祈りによって救われたのでした。

「見よ、わたしと、主のわたしに賜わった子たちとは、シオンの山にいます万軍の主から与えられたイスラエルのしるしであり、前ぶれである」(イザヤ8:18)。

闘争と勇気

Conflict and Courage



7月

神との契約

「ダビデの子ソロモンはその国に自分の地位を確立した。その神、主が共にいまして彼を非常に大いなる者にされた。」(歴代志下1:1)

ソロモンの治世の初期の真の栄光は、卓越した知恵、驚くばかりの富、また、彼の広範囲に及んだ権力と名声にあったのではなかった。それは、彼が神の賜物を賢明に用いることにより、イスラエルの神の名をたたえたことにあったのである。(国と指導者上巻 9)

高貴な身分に生まれて成人し、神に愛されたソロモンは、繁栄と栄誉を約束された統治の位についた。諸国の民は、神が知恵をお与えになったソロモンの知識と洞察力に驚嘆した。しかし繁栄の誇りはやがて神からの離反をもたらした。神と交わる喜びから離れて、ソロモンは官能の快楽に満足をもとめた。(教育171,172)

サタンは服従に伴う結果についてよく知っていたので、ソロモンの治世の初期、 すなわち王の知恵と善行、その高潔さによる栄誉に満ちた年月の間、原則に対す るソロモンの忠誠を気づかれないように蝕み、神から離れさせる感化をもたらそ うと努力していた。(クリスチャンの教育の基礎 498)

ソロモンを偉大な責任ある地位につけたことで、主は間違いを犯されたのだろうか。否、神はこれらの責任を負えるように彼を準備なさり、服従を条件に、恩恵と力を約束なさった。……

神は、主にある人々を責任ある立場に据えられる。それは彼ら自身の意向ではなく、主のみ旨を遂行するためである。主の統治の純粋な原則を大事にする限り、主は彼らを主の器として認知なさり、彼らを祝福し強められるであろう。原則に対して真実な者を、神は決して見捨てられない。(SDA パイプル・コメンタリ [E・G・ホワ イト・コメント]3 巻 1128)

主は、ソロモンが主の道に歩むなら、その祝福は彼と共にあり、知恵が与えられるであろうと約束された。しかし、ソロモンは神との契約を守り続けることに失敗した。彼は自分自身の心を駆り立てたことに従ったので、主は彼が自分自身の衝動に従うままにされた。

今日一人一人に、担うべき役割、すなわち果たすべき義務とやり抜くべき責任がある。だれ一人として上からの知恵なしに、自分の役目を無事に果たすことはできない。(手紙 104, 1902 年)

小さな子供のように

「わたしは小さい子供…ゆえ、聞きわける心をしもべに与えて、あなたの民をさばかせ」(列王記上 3:7,9)

ギベオンにおける昔ながらの祭壇の前でささげた、ソロモンの祈りの言葉は、彼の謙遜と神に栄誉を帰そうとする熱意をあらわしている。もし神の助けがなければ、彼に負わせられた責任を果たすのに、彼は子供のように無力であることを自覚したのである。彼は識別力に欠けているのを知り、このような大きな必要感から知恵を神に願い求めたのである。彼の心の中には、他の者の上に自分を高めようとする利己的な知識に対する野望はなかった。彼は自分に負わせられた義務を忠実に果たすことを願った。そして、彼の治世を神に栄光を帰するものにすることができるような賜物を選んだ。ソロモンは、「わたしは小さい子供であって、出入りすることを知りません」と告白したときほどに富み豊かで、賢明で、真に偉大だったことはなかったのである。

今日、責任を負わせられている者は、ソロモンの祈りが教える教訓を学ばなければならない。人の占める地位が高ければ高いほど、背負う責任も大きく、及ぼす影響の範囲も広くなり、神に依存する必要もそれだけ大きいのである。働きの召しとともに、同胞の前で用心深く歩くという召しをも受けていることを、常に記憶していなければならない。彼は学ぶ者の態度で神の前に立たなければならない。地位は品性を清くしない。人間が真に偉大なものとされるのは、神を尊び、神の命令に従うことによってである。(国と指導者上巻 6)

わたしたちの神への嘆願は、利己的な野心で満たされている心から出てきてはならない。神に栄光を帰するような賜物を選ぶように神は勧めておられない。神は地上のもののかわりに天上のものを選択するよう望んでおられる。神はわたしたちの前に、天の交わりの可能性と利点を解放される。神はわたしたちに最も高尚な目的を持つようにと励ましを与え、わたしたちの最高の宝を保証しておられる。この世のものへの執着が払い除けられる時、信じる者はどのような地上の災害によっても失われることのない天の宝と富を持つであろう。(SDA パイプル・コメンクリ [E・G・ホワイト・コメント | 2 巻 1026)

求める者のための知恵

「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」(ヤコブ 1:5)

われわれが仕える神は人をかたよりみないかたである。ソロモンに賢く物をわきまえる霊をお与えになったかたは、今日、神の子供たちに同じ祝福を喜んでお与えになる。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」と神のみ言葉に書いてある。重荷を背負っている者が、富、権力、名声を求める以上に知恵を求めるならば、失望させられることはない。このような人は、ただ何をすべきかということだけでなく、どのような方法でそれを行って、神のみこころにかなうようにすべきかを、偉大な教師であられるイエから学ぶのである。

神が識別力と才能をお与えになった人は、献身を維持している限り、高い地位に対する熱望をあらわしたり支配したり監督したりしようと努めない。人は必要に迫られて責任を負わなければならない。しかし、真の指導者は最高の地位を求めようとはせず、善悪をわきまえる理解力が与えられることを祈り求めるのである。

指導者の立場に置かれた人々の道はやさしいものではない。しかし、彼らは 困難に出会うごとに、それが祈りへの招きであることを認めなければならない。 彼らは、あらゆる知恵の大いなる源であられる神のみこころを伺うことを怠っては ならない。彼らは、大いなる働き人であられる主の力と教えを受けて、悪の勢力 に固く立ち向かい、善悪、正邪の区別をすることができるようになる。彼らは神 がお認めになるものを認め、神のみ事業のなかに誤った原則がとりいれられるこ とに極力反対するのである。

神はソロモンが、富、栄誉、あるいは長寿などよりも願い求めた知恵を、彼にお与えになった。機敏な知力、寛大な力、慈悲深い精神に対する彼の祈願は聞き入れられた。(国と指導者上巻 6-8)

わたしたちがソロモンの祈りを注意深く研究すること、また主が喜んで彼に与えられた豊かな祝福を受ける条件についてよく考えるのは良いことである。

神はソロモンの祈りをよしとされた。そして神は今日信仰とへりくだりのうちに、ご自分に助けを叫び求める人々の祈りを聞き入れられるのである。このお方は奉仕の準備のための熱心な祈りに必ず応えられる。「わたしはここにおる。あなたに何を与えようか」と言われるのである。……この祈りをするようにとソロモンの思いを導かれたお方は、今日ご自分の僕たちに、自分の必要のためにどのように祈るかをお教えになる。(SDA パイプル・コメンクリ [E・G・ホワイト・コメント | 2 巻 1026)

人々のうちで最も賢い者

「彼はまた草木のことを論じてレバノンの香柏から石がきにはえるヒソプにまで 及んだ。彼はまた獣と鳥と這うものと魚のことを論じた。」(列王記上 4:33)

年月が経過して、ソロモンの名声が高まったときに、彼は、自分の知的、霊的能力を強めて、彼が受けた祝福を他の人々に分け与え続けることにより神に栄光を帰そうとした。彼に権力と知恵と悟りが与えられたのは、主の恵みによるものであること、また、これらの賜物が与えられたのは、彼が王の王の知識を世界に伝えるためであったことを他のだれよりもよく知っていたのは彼であった。

ソロモンは博物学に特に興味を持ったが、彼の研究は学問の一分野だけにと どまらなかった。彼は生物、無生物を問わず、創造されたあらゆる事物を熱心 に研究して、創造主について明快な考えを持った。彼は、自然界の威力、鉱物 や動物界、あらゆる樹木、かん木、草花の中に、神の知恵の啓示を見た。そして、 彼は学べば学ぶほど、神についての知識と神を愛する愛とが、絶え間なく増し加 わるのであった。ソロモンの霊感による知恵は、賛美の歌や多くの格言となって 表現された。……

ソロモンの箴言には、清い生活と大きな努力の原則、敬虔な生活へ導く天来の原則、人生のあらゆる行動を支配すべき原則などの概略が述べられている。このような原則が広く一般に普及していたことと、すべての賛美と誉れを帰すべきおかたとして、神を認めたことが、ソロモンの初期の治世を、物質的繁栄と同時に道徳的に向上した時代としたのであった。……

後年において、ソロモンがこれらの驚くべき知恵の言葉に聞き従ったならば、 どんなによかったことであろう。「知恵ある者のくちびるは知識をひろめる」(箴言 15:7) と言った人、また、地上の王に帰そうとした賛美を王の王に献げるように 地の王たちに教えたその当人が、「高ぶりとおごりと……偽りの言葉」によって、 神にのみ帰すべき栄光を自分に帰すことをしなかったならば、どんなによかったこ とであろう。(国と指導者上巻 9-11)

何という墓碑名であろう

「だから、『彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ』、と主は言われる。」(コリント第二 6:17 上旬)

ソロモンが高い地位にあって持っていたのと同様、限られた領域においてではあったが、はじめはすばらしく前途有望であった多くの人々が、結婚関係における取り消すことのできない誤った一歩を踏み込むことによって、自らの魂を失い、また他の人々を破滅に招く。ソロモンの妻たちが彼の心を神から偶像崇拝に向けたように、原則の深みを持たない軽薄な伴侶たちは、以前は高潔で真実だった人々の心を虚無や堕落した楽しみや全くの悪徳に向ける。(SDA パイプル・コメンク 別 [E・G・ホワイト・コメント]2 巻 1031)

ソロモンは彼の知恵と模範の力が、彼の妻たちを偶像礼拝から真の神の礼拝に導き、こうして結ばれた同盟によって周囲の国々はイスラエルと親密になるだろうと、安易に考えていた。しかしそれはむなしい望みであった。ソロモンが、自分は異教徒の影響に十分抵抗できると誤って判断したことは、致命的であった。また、自分は神の律法を無視したとしても、他の人々はその聖なる戒めを尊んで従うだろうという希望を彼に抱かせた欺瞞もまた致命的なものであった。(国と指導者上巻 29,30)

ソロモンの背教という悲しい記憶でもって、同じ断崖を避けるようにすべての 魂に警告しよう。……かつては権力を行使し、神に愛されたと言われた偉大な王は、誤って与えられた愛情によって汚され、神から見捨てられた。地上の最も力強い支配者は、自分自身の激情を支配することに失敗した。ソロモンは「火の中をくぐって」救われたかもしれない。しかし、彼の悔い改めはこれらの高き所を取り除くことができなかったし、またこれらの石を取り壊すこともできなかった。そして、それらは彼の罪の証拠として残った。彼は神の性質にあずかるよりもむしろ強い欲望に支配されるのを選ぶことによって神のみ名を辱めた。ソロモンの生涯は、彼の例を使って自分自身の卑劣な行為を覆い隠そうとする人々に、何という遺産を残したことであろう。わたしたちは善悪どちらかの遺産を伝えなくてはならない。わたしたちの生涯と模範は祝福となるのであろうか。それとものろいになるのであろうか。人々はわたしたちの墓を見て、「彼はわたしを滅ぼした」と言うのであろうか。それとも「彼はわたしを救った」と言うのであろうか。(SDA バイブル・コメソリ [E・G・おり・コメト] 2 巻 1031)

裏切り

「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。」(マタイ 6:24)

ソロモンは気がつかないうちに徐々に背信していって、神から遠くさまよい出た。彼はほとんど無意識のうちに、徐々に神の導きと祝福に頼ることをやめて、自分自身の力に頼り始めた。……

王は外面的虚飾において他の国々をしのごうという圧倒的野望に心を奪われて、品性の美と完全を得ることの必要を見過ごした。彼は世界の前で自己に栄光を帰すことを追求して、彼の名誉と誠実さとを犠牲にした。……彼の治世の初期に、人々を扱うときに彼が抱いていた、良心的で同情に満ちた精神は変わってしまった。彼は、最も賢明で最も恵み深かった王から、暴君に堕落してしまった。かつては、情け深く神を恐れる国民の指導者であった彼が、圧政的な独裁者になった。(国と指導者上巻 30, 31)

金銭を使用する人々はソロモンの生涯から教訓を学ばなければならない。資力のある人は、金銭や立場によって自分はすぐれた者だと思い、自分たちはそれほど厳密である必要はないと考える危険性がたえずある。しかし自己賞揚は泡沫にすぎない。自分に与えられたタラントを誤って用いることにより、ソロモンは神を捨てた。神が人間に繁栄をお与えになる時、彼らは自分自身の心にある想像の産物に従わないように気をつけねばならない。自分の信仰の単純さを危険にさらし、宗教体験の質を悪くさせないためである。(原稿 40, 1898 年)この堕落した人生の経歴からわたしたちが学ぶべき教訓は、絶えず神の勧告に頼る必要性であり、わたしたちの歩みの傾向に注意深く気をつけることと、神からわたしたちを引き離しそうなあらゆる習慣を改善することである。熱心な注意と用心深さと祈りが、信仰の単純さと純潔さを汚さないで守るのに必要であることをわたしたちに教えている。もし、わたしたちが最も高い道徳的卓越さにまで上り、宗教的品性の完全さに達したいと思うならば、友を作ることに、また生涯の伴侶を選ぶことにどれほど注意深くあるべきであろうか。(SDA パイプル・コメンタリ [E・G・ホワイト・コメント]2 巻 1031)

真の富

「主の祝福は人を富ませる、主はこれになんの悲しみをも加えない。」(箴言 10:22)

多くの人は、ソロモンの人気と豊かな繁栄をうらやんで、すべての人の中で彼が最も幸福に違いないと思っていた。しかし、人がうらやんだうわべだけの見せびらかしというあらゆる栄光の中で、彼は最も哀れに思われるべき人である。彼の絶望した顔の表情は暗い。彼が、道楽とあらゆる欲望の自己満足を通して幸福を求める浪費の生活を回顧する時、彼のまわりの栄華は、彼にはただ、苦痛や苦悩の思いというあざけりにしかならない。(SDA パイプル・コメンタリ [E・G・ホワイト・コメント]2巻1030)

繁栄のただ中に危険が潜んでいた。いつの時代においても、富と栄誉には、謙遜と霊性を失う危険が伴っていたのである。運ぶのが難しいのは空のコップではない。注意深くバランスを保たなければならないのは、ふちまで満たされたコップである。苦難と逆境は悲しみをもたらすであろうが、霊的生活に最も危険なのは繁栄である。人間は常に神のみこころに従い、真理によって清められているのでなければ、繁栄の時に、生まれながら持っている自己信頼の傾向が必ず出てくるものである。

人々が屈辱の谷間で神の教えを仰ぎ、一歩一歩神の導きに依存している時は、 比較的安全である。しかし、高い塔の上のようなところに立ち、その地位のゆえ に大きな知恵の持ち主であるかのように思われるときに、その人々は大いなる危 険にさらされているのである。彼らは神に寄り頼まない限り必ず倒れるのである。

誇りと野心を抱くときに、人は人生において必ず失敗する。というのは、誇りは必要を感じないので、天の無限の祝福に対して心を閉ざしてしまうからである。自分に栄光を帰することを求める者は、自分が神の恵みに欠けていることを見い出すであろう。われわれは神の力によって、真の富と最も満足感のある喜びを味わうことができるのである。すべてをキリストのために献げて、キリストのためにすべてをなす人は「主の祝福は人を富ませる。主はこれになんの悲しみをも加えない」という約束が成就されるのを知るであろう。(国と指導者上巻 34,35)

ソロモンのあらゆる罪と不謹慎は、知恵を求めて神に信頼することと、神のみ前に謙遜に歩むことを止めたところに、その原因を見出すことができる。(SDA パイプル・コメンタリ [E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 1031)

十字路で

「諸国の人々はソロモンの知恵を聞くためにきた。地の諸王はソロモンの知恵を聞いて人をつかわした。」(列王記上4:34)

ソロモンの時代に、イスラエル王国は北はハマテから南はエジプト、また、地中海からユフラテ川にまで及んだ。この地域の中を昔ながらの通商路が数多く通っていた。そして、遠国からの隊商が絶えず行き来していた。こうして、ソロモンとその国民には、万国の人々に、王の王の品性をあらわし、彼らに神をあがめて従うように教える機会が与えられていた。……

ソロモンはまわりの国々に対する燈台として立てられた国家の首長の地位におかれていたので、神と神の真理を知らない人々に光を照らすための大運動を組織して、それを指導するために、神から与えられた知恵と影響力とを用いなければならなかった。そうするときに、多くの人々が神の戒めに忠誠をつくすようになり、イスラエルは異教徒の悪習慣から保護され、栄光の主は大いにあがめられたことであろう。ところが、ソロモンはこの大いなる目的を見失ってしまった。彼は彼の領地を絶えず通過し、主要な町々に滞在する人々に光を照らすすばらしい機会を活用しなかったのである。

神がソロモンとすべての真のイスラエル人の心に植えつけられた伝道の精神は、商業主義の精神に取って換わられた。多くの国々との接触によって与えられた機会は、自己の勢力を増強するために用いられた。……

このわれわれの時代においては、あらゆる階級の男女と多くの国民とに接する機会が、イスラエルの時代よりはるかに多いのである。交通の路線はおびただしく増加しているのである。今日の至高者の使命者たちは、キリストのように世界のあらゆる所から来る群衆に接することができる、これらの主要道路に位置を占めていなければならない。彼らは主のように神の中に自己を隠して、福音の種をまき、他の人々に聖書の尊い真理を示さなければならない。それらは、人々の思いと心の中に根をおろし、芽生えて永遠の命に至るのである。(国と指導者上巻46,48)

気づくのが遅かった

「そこで、わたしはわが手のなしたすべての事、およびそれをなすに要した労苦を顧みたとき、見よ、皆、空であって、風を捕えるようなものであった。日の下には益となるものはないのである。」(伝道の書 2:11)

ソロモンは自分自身の苦い経験から、地上の事物のなかに人生の最高の幸福を求めることのむなしさを学んだ。彼は異教の神々の祭壇を建てたが、それらが与える心の平安の約束がどんなにむなしいものであるかを学んだに過ぎなかった。陰惨な心の悩みが、夜も昼も彼を苦しめた。彼にはもはや人生の喜びも心の平和もなく、将来は暗たんとしていた。

しかし、主は彼を見捨てられなかった。主は譴責の言葉と厳しい刑罰によって、 王の行為の罪深さを彼に自覚させようとなさった。 ……

ついに主は、預言者によって、ソロモンに驚くべき言葉をお伝えになった。 ……わたしは必ずあなたから国を裂き離して、それをあなたの家来に与える。 しかしあなたの父ダビデのために、あなたの世にはそれをしないが、あなたの子の手からそれを裂き離す。

ソロモンは彼と彼の家に対するこの刑罰の宣告によって、夢からさめたかのように、本心に立ち返り、彼の愚行の真相を見始めた。彼は神の懲らしめを受け、精神も体も衰弱して疲れ果て、かわき切って、世の水がめから離れて、もう一度生命の源の水を飲むために帰ってきた。……

彼は罪の有害な結果を逃れて、自分がたどったあらゆる放縦の道を忘れ去ることはできなかった。しかし、愚かな道を歩かないように、熱心に他の人々に説き勧めるのであった。……

真に悔い改めた人は自分の過去の罪を忘れてしまわない。彼は平和が与えられるやいなや、自分の犯した誤りに関して無関心のままにすごすことはない。彼は自分の行為によって悪に引き入れられた人々のことを考え、できる限りのことをして、彼らを正しい道に引き返そうとするのである。彼が受けた光が明るければ明るいほど他の人々の足を正しい道に導きたいという願いもまた強力なのである。(国と指導者上巻 51-53)

体験の声

「若い者よ、あなたの若い時に楽しめ。あなたの若い日にあなたの心を喜ばせよ。 あなたの心の道に歩み、あなたの目の見るところに歩め。ただし、そのすべての事 のために、神はあなたをさばかれることを知れ。」(伝道の書 11:9)

ソロモンの人生から学ばされる教訓は、高齢者の人々、人生の坂道を下って 西の空に没する太陽を眺める人々にとって特別な意味がある。わたしたちはイエ ス・キリストへの愛と信仰によって支配されていない若者の品性に欠点を見るで あろう。善悪の間で迷っていて、ゆるぎない原則と破滅に向かって足を押しなが す程の抵抗できない強い悪の流れとの間でゆれている若者を見る。しかし、成 熟した人々には、良いことを期待する。彼らは確固とした品性を築き、原則にし っかりと立ち、もう堕落するような危険はないと考えるであろう。しかし、ソロモ ンの場合はわたしたちの前に警告の標識として立っている。あなたが人生の闘い を終えた老いた巡礼者になって立っていると思うとき、倒れないように気をつけ なさい。ソロモンの場合、生まれつき大胆で、強固な性格が、何ともろく誘惑者 の勢力下で風の中の葦のように揺れたことであろう!レバノンの古くて節の多い杉 の木、バシャンの頑丈なカシの木は、何ともろく誘惑の強風の前に折れ曲がった ことであろう!絶えず目を覚まして祈り、自分の魂を救うことを望むすべての人々 のために、何という教訓であろう!内なる腐敗と外からの誘惑との闘いのために、 しっかりとキリストの恵みを心に保つようにとの、何という警告であろう。 (SDA バ イブ・ル・コメンタリ [E・G・ ホワイト・コメント]2巻 1031, 1032)

自分も回復できると思って、だれもあえて罪の中に入り込んではならない。罪にふけると、永遠に失われる危険以外には何もないのである。しかし堕落してしまった者でも、絶望してあきらめてしまう必要はない。かつては神に栄誉を授けられた老齢の人々が強い欲望という祭壇の上で美徳を犠牲にして自分たちの魂を汚してしまったかもしれない。しかしその人々が悔い改めて、罪を捨て去り、神に立ち帰るなら、まだ彼らに望みはあるのである。ソロモンの場合における気高いタラントの誤用はすべての者にとって警告とならなければならない。高潔だけが真に偉大なのである。(手紙8b, 1891年)

清められていない技術

「こうしてヒラムはソロモン王のため、神の宮の工事を終えた。」(歴代志下 4:11)

選ばれた人々は荒野の幕屋建設にさいして、神から知恵と技術を特別に授けられた(出エジプト記 35:30 - 35 参照)。……この人々の子孫は自分たちの先祖に与えられた技術を大部分受け継いでいた。……しばらくの間この人々は謙遜で無我であったが、徐々にほとんど気づかないうちに神とその真理から離れた。彼らは自分たちの優秀な技術のゆえに、より高い賃金を求め始めた。ある場合には彼らの要求は認められたが、もっと頻繁により高い賃金を求める者たちは、周囲の国々に職を見つけた。……モリヤ山上の宮の建設を監督するすぐれた職人を、ソロモンはこれらの背教者たちに求めたのである。……

職人の長のヒラムは、母方が、数百年前に神が幕屋の建設のために特別の知恵を与えられたアホリアブの子孫であった。このようにしてソロモンの職人仲間の長に聖別されていない人が置かれたが、彼はその並はずれた技量のゆえに多額の賃金を要求した。……貪欲の精神をもったこの人を雇うことによって有害な影響が作用し始め、奉仕のあらゆる部門に広がって、ソロモンの王国全体に及んだ。……浪費と堕落がいたる所に見られた。貧しい者は金持ちに圧迫され、神の奉仕に自己犠牲の精神がほとんどなくなってしまった。

ここに今日の神の民にとって最も重要な教訓、すなわち多くの者がなかなか学ぼうとしない教訓がある。……働き人の長であられる方に従っていると公言する人々、神の共労者としてその奉仕に携わっている人々は、自分たちの働きに、完全であられる神が地上の幕屋建設に要求された厳密さと技術、機転と知恵を持ち込まなければならない。そしてキリストが地上で奉仕された時と同様に、今も神に対する献身と犠牲の精神が神に受け入れられる奉仕の最初の必要条件と見なされるべきである。(セレクテッド・メッセージ 2 巻 174 – 176)

おりにかなった賛美

「あなたの神、主はほむべきかな。主はあなたを喜び、あなたをイスラエルの位にのぼらせられました。主は永久にイスラエルを愛せられるゆえ、あなたを王として公道と正義とを行わせられるのです。」(列王記上 10:9)

ソロモンよりも偉大なおかたが神殿を設計なさったのであった。そこに、神の 知恵と栄光があらわされた。この事実を知らなかった人々は、その設計家であり、 建設者であるソロモンを賞賛したのは当然のことであった。しかし、王はその構 想または建設に関する栄誉を自分に帰することをしなかった。

シバの女王が彼を訪問したときに、ソロモンはそのような状態であった。彼女は、彼の知恵と彼が建てた壮麗な神殿のことを聞いて、「難問をもってソロモンを試みようと」した。そして、彼の有名な工事を自分の目で見ようとした。彼女は多くの従者を連れ「香料と、たくさんの金と宝石とをらくだに負わせて」はるばるエルサレムにやって来た。「彼女はソロモンのもとにきて、その心にあることをことごとく彼に告げた」。彼女は自然界の神秘について彼と語った。そして、ソロモンは自然界の神、偉大な創造者、いと高き天に住んで、万物を支配しておられる神について、彼女に教えた。「ソロモンはそのすべての問に答えた。王が知らないで彼女に説明のできないことは一つもなかった」。

「シバの女王はソロモンのもろもろの知恵と、ソロモンが建てた宮殿、……を見て、全く気を奪われてしまった」。「わたしが国であなたの事と、あなたの知恵について聞いたことは真実でありました。しかしわたしがきて、目に見るまでは、その言葉を信じませんでしたが、今見るとその半分もわたしは知らされていなかったのです。あなたの知恵と繁栄はわたしが聞いたうわさにまさっています」……

シバの女王は、その訪問の終わりごろになると、ソロモンから彼の知恵と繁栄の源について十分の教えを受けたので、人間を高めるのではなくて、「あなたの神、主はほむべきかな。主はあなたを喜び、あなたをイスラルの位にのぼらせられました。主は永久にイスラエルを愛せられるゆえ、あなたを王として公道と正義とを行わせられるのです」と叫ばずにはおられなかった。すべての国民にこのような印象が与えられることが、神のご計画であった。(国と指導者上巻 41, 42)

不名誉な記念碑

「わたしは日の下に一つの悪のあるのを見た。それはつかさたる者から出るあやまちに似ている。すなわち愚かなる者が高い地位に置かれ」ている。(伝道の書10:5,6)

ヨシヤ王の時代に神の宮の反対側に異なる光景が見られた。オリブ山の上に そびえ立つもの、ミルトスとオリブの木立ちの上に見えているものはその場にふさ わしくない巨大な偶像であった。ヨシヤ王はこれらの偶像を壊すようにと命令し、 それが実行されて、砕かれた破片がキデロンの谷にころがった。偶像の礼拝堂 は廃墟のかたまりのまま放っておかれた。

しかし多くの敬虔な礼拝者が、「どうしてエホシャパ峡谷の反対側にこのような建造物があって、不敬にも神の宮に向いあっているのか」と質問した。正直な答えがなされねばならない。すなわち建設者はかつて大いなる権力をふるっていた最大の王ソロモンであると。これらの偶像は、諸王の間で最も賢いと賞賛され、名誉を受けていた彼が、屈辱的な敗残者になったという証をしていた。

かつては神と正義のために勇敢で真実であった彼の高貴な品性は堕落してしまった。利己的な放縦をするための浪費は彼をサタンの策略の道具とした。ソロモンの良心は無感覚になり、裁判官としての行為は公正と正義から暴政と圧迫へと変化した。……ソロモンは光と闇、キリストとベリアル、純潔と不純を合体させようとした。しかし異教徒を真理に改心させる代りに、異教の心情が彼の宗教と合体し、彼は背教者となった。(原稿 47, 1898 年)

ソロモンの背教の汚点は、何年も彼につきまとった。キリストの時代、宮の礼拝者たちは、彼らの反対側に、違反の山を見ることができた。彼らは、華美で壮麗な宮の建築者、すべての王たちの中で最も有名な王が、神から離れ異教の偶像のために祭壇を建築したこと、地上で最も力強い支配者が、自らの精神を支配し損なったことを思い出すことができるのであった。ソロモンは悔い改めた人として臨終の床についた。しかし彼の後悔と涙は、彼の神からの卑劣な離反の罪を、違反の山からぬぐい去ることはできなかった。荒廃した城壁と破壊された柱は、かつて地上の王座に君臨した最も偉大な王の背教に対して何千年もの間、無言の証言をしたのである。(SDA パイプル・コメンタリ [E・G・ホワイト・コメンクト [2 巻 1032, 1033)

イスラエルも皆彼にならった

「レハベアムはその国が堅く立ち、強くなるに及んで、主のおきてを捨てた。イスラエルも皆彼にならった。」(歴代志下 12:1)

ソロモンが背信した時の濫費は、人々に重税を課し、彼らから多くの労役を要求するに至らせた。……

もしレハベアムと未経験な彼の助言者たちが、イスラエルに関する神のみこころを理解したならば、彼らは国家の行政に決定的改革を求める国民の要求を聞き入れたことであろう。しかし、シケムの集会においてやってきた好機に際して、彼らは、原因から結果を推論することをしなかった。……

霊感の筆は、ソロモンの後継者が、主に忠誠をつくすために強力な影響を及ぼさなかったという悲しい記録をとどめている。彼は生まれながら強情で、自己を過信し、わがままで偶像礼拝を好んだのであったが、もし彼が神に心から信頼したならば、強い品性と堅い信仰と神の要求に服従する精神を啓発させることができたのであった。しかし、時が経過するにつれて、王は地位の権力と彼が建てた要害を頼りにするようになった。……

「イスラエルも皆彼にならった」という言葉は、なんと悲しく、なんと深い意義を持っていることだろう。周囲の国々に対する光として神が選ばれた民が、力の根源から離れて、周囲の国々と同じようになろうとしていた。ソロモンと同様に、レハベアムの悪影響も、多くの人々を神から離れさせた。悪にふける者は、今日においても、程度の差こそあれ、彼らと同じであって、悪行の影響は、それを行った者だけにとどまらない。だれひとりとして、自分だけで生きていないのである。また、だれひとりとして、その罪のなかでひとりで死なない。どの人の生涯も、他の人々の道を明るく楽しいものにする光となるか、それとも、失望と破滅をもたらす暗いみじめな影響力となるのである。われわれは、他の人々を幸福と永遠の生命に向上させるか、それとも、悲哀と永遠の死へと堕落させるかのどちらかである。そして、われわれが自分たちの行為によって、われわれのまわりにいる人々の悪の力を強めて、活動を起こさせるならば、われわれは、彼らの罪にあずかるのである。(国と指導者上巻 62-68)

麻痺した手

「彼にむかって伸ばした手が枯れて、ひっ込めることができなかった。」(列王記上 13:4)

ヤラベアムは、これを見て、神に対する反抗的精神に満たされ、彼に使命を 伝えた者を止めようとした。彼は怒って、「祭壇から手を伸ばして、『彼を捕えよ』 と言ったが」、彼の性急な行動は、直ちに譴責を受けた。主の使命者に向かって 伸ばした手は、急に力がぬけて、枯れ、ひっ込めることができなくなった。

王は驚いて、彼のために神に祈ってほしいと、預言者に訴えた。「『あなたの神、 主に願い、わたしのために祈って、わたしの手をもとに返らせてください』。神の 人が主に願ったので、王の手はもとに返って、前のようにった」。

異教の神の祭壇を厳粛に奉献しようとしたヤラベアムの努力はむだに終わった。それを尊敬するということは、エルサレムにある主の神殿の礼拝を敬わないことになるのであった。イスラエルの王は、預言者の言葉を聞きいれて、神の礼拝から人々を引き離していた彼の邪悪な目的を悔い改めて捨て去るべきであった。しかし、彼は心をかたくなにして、自分勝手な道を歩こうと決意したのである。......

主は、滅ぼすことではなくて、救おうと努めておられる。主は罪人を救うことを喜ばれる。「わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない」(エゼキエル33:11)。彼は警告と嘆願とによって、心のかたくなな人々が、彼らの悪い行いを離れて神に帰り、生きるように呼びかけておられる。神は、お選びになった使命者に、聖なる大胆さをお与えになる。それは、聞く人々が恐れを抱いて、悔い改めに至るためである。神の人は、なんと厳然と王を譴責したことであろう。そして、この確固不動の態度は必要であった。これ以外に、当時の罪悪を譴責する方法はなかった。主は、聞く者の心に忘れ得ない印象を与えるために、彼のしもべに大胆さをお与えなったのである。主の使命者は、人の顔を恐れずに、正義のために、ひるまず立たなければならない。彼らは、神に信頼しているかぎり、恐れる必要はない。なぜならば、任命を彼らにお与えになるかたは、また、彼の守護の確証をもお与えになるからである。(国と指導者上巻74-77)

アサは神により頼んだ

「時にアサはその神、主に向かって呼ばわって言った、『主よ、力のある者を助けることも、力のない者を助けることも、あなたにおいては異なることはありません。われわれの神、主よ、われわれをお助けください。われわれはあなたに寄り頼み、あなたの名によってこの大軍に当ります。主よ、あなたはわれわれの神です。どうぞ人をあなたに勝たせないでください』。」(歴代志下 14:11)

「エチオピヤびとゼラが、百万の軍隊と三百の戦車を率いて」攻めて来たときに、アサの信仰ははげしく試みられた。アサは、こうした危機において、彼が建てた石垣とやぐらと門と貫の木のあるユダの「要害の町」や、訓練された彼の軍勢の「大勇士」たちにも頼らなかった。王は万軍の主によりたのんだ。……アサは、彼の軍隊を戦闘体勢にしておいて、神の助けを仰いだのである。

今や、敵軍は眼前に迫ってきた。これは、主に仕える者にとって試練の時であった。すべての罪を告白したであろうか。ユダの人々は神の救いの力に全的に信頼したであろうか。指導者はこのような事を考えていたのでる。人間的考えからすれば、エジプトの大軍はその前にあるものをみな一掃するように思われたのである。しし、アサは、平和の時に、娯楽と快楽にふけっていなかった。彼は、どんな緊急事態にも対処できるように準備していたのである。彼は戦闘の準備のできた軍隊をもっていた。彼は国民に神との平和を結ばせるように努力したのであった。そして、今、彼の軍隊は、敵軍よりも数は少なかったが、彼が信頼した神に対する信仰は少しも衰えなかった。

王は、繁栄の時に主を求めていたのであるから、こうした逆境の時においても、 主によりたのむことができた。彼の嘆願は、彼が、神の驚くべき力を知らない人 でなかったことを示している。……

アサの祈りは、すべてのキリスト者が祈るにふさわしい祈りである。……われわれは、人生の戦いにおいて、正義に反抗する悪の勢力に立ち向かわなければならない。われわれの希望は人間ではなくて、生ける神にある。われわれは、神が、み名の栄光のために、神の全能の力を人間の器の努力に結びつけてくださることを、心から確信して期待することができる。われわれは、神の義の武具をまとって、すべての敵に勝利すことができるのである。(国と指導者上巻 81,82)

イゼベルの破壊的影響

「アハブのように主の目の前に悪を行うことに身をゆだねた者はなかった。その妻イゼベルが彼をそそのかしたのである。」(列王記上 21:25)

アハブは、道徳的能力が弱かった。彼が、勝気で積極的性格の持ち主であった異邦の女と結婚したことは、彼自身と国家とに悲惨な結果をもたらした。主義をもたず、正しい行為に対する高い標準も持っていなかったので彼の性格は、イゼベルの決然とした気質にやすやすと動かされていった。……

イスラエルは、アハブの治世の破壊的影響の下にあって、生ける神から遠く離れ、神の前で悪を行った。彼は、長年の間、神を敬い恐れる心を失ってきていた。そして、今となっては、広く行きわたった神を汚す精神に公然と反対して立ち上がり、彼らの生活を大胆に暴露するものはひとりもいなくなったように見えた。背信の暗い影が全国をおおった。バアルとアシタロテの像は至るところにあった。人間の手のわざが礼拝された偶像礼拝の神殿と奉献された木立とは増し加えられた。空気は、偽りの神々に献げられる犠牲の煙で汚染された。日、月、星に犠牲を献げた異教の祭司たちの酒に酔った叫びが、丘や谷にこだましていた。

イゼベルと彼女の邪悪な祭司たちの影響を受けて、人々は、神としてあがめられている偶像が、その神秘的な力によって、地、火、水などの宇宙の構成要素を支配していると教えられた。天のあらゆる境界、流れる小川わき出る泉の流れ、静かにくだる露、地をうるおし、田畑に豊かな実りをもたらす雨などは、みな、あらゆるい完全な賜物の与え主であられる神からのものではなくて、バアルとアシタロテの恵みによるものとされたのである。人々は、丘や谷、流れや泉などが、生ける神のみ手のうちにあること、また、神は、太陽、空の雲、その他すべての自然の力を支配しておられることを忘れた。……

彼らは愚かにも、神と神の礼拝を拒絶した。(国と指導者上巻85,86)

非献身的な女性の力を悟っている人はなんと少ないことであろう。……もしアハブが天の勧告のうちに歩んだならば、神はアハブと共におられたであろう。しかし、アハブはこれをしなかった。彼は偶像礼拝に身を捧げた女性と結婚した。イゼベルは、王に対しては神よりも威力があった。彼女は彼と民を偶像礼拝に導いた。(SDA パイプル・コメンタリ [E・G・ホワイト・コメント]2 巻 1033)

荒野の声

「ギレアデのテシベに住むテシベびとエリヤはアハブに言った、『わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます。わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう』。」(列王記上 17:1)

アハブの時代に、ヨルダン川の東のギレアデの山中に、信仰と祈りの人が住んでいて、彼の大胆な活動によって、急速に進んでいたイスラエルの背信は阻止されるのであった。テシベびとエリヤは、有名な都市から遠く離れて住み、高い地位を占めてはいなかったけれども、神が彼の前に道を備えて、豊かな成功をお与えになることを確信して、仕事に着手したのである。彼は信仰と力に満ちた言葉を語った。そして、彼はその全生涯を、改革の事業に献げていた。彼は、罪を譴責し、罪悪の潮流を押しとどめるために、荒野に呼ばわる者の声であった。彼は罪の譴責者として、人々のところに来たのではあったが、彼の言葉は、癒しを願うすべての悩める人々に、ギレアデの乳香を与えたのである。……

天からの刑罰の言葉をアハブに伝える任務が、エリヤに負わせられた。彼は主の使命者になることを求めたのではなかった。主の言葉が彼に臨んだのである。彼は神の働きの栄誉のために熱心だったので、従うことは悪の手にかかって、速やかに殺されることを招くようなものであったが、神の召しに従うことをためらわなかった。……

エリヤが彼の言葉を語ったのは、神のみことばの確実な力に対して強い信仰を働かせたからにほかならなかった。もし彼が自分が仕える神に絶対的信頼を持っていなかったならば、アハブの前に立つことはしなかったであろう。エリヤはサマリヤへ行く途中で、水のつきない流れや、緑におおわれた山々や、かんばつに襲われそうもない堂々とした森林を通過した。彼が見たものは、すべて、美におおわれていた。預言者は、どのようにして、流れの水が止まって干からび、山々や谷が、かんばつで焼けつくようになるだろうかと、怪しむこともできた。しかし、彼は、不信仰におちいらなかった。彼は、神が背信したイスラエルを卑しめて、刑罰によって彼らを悔い改めさせることを疑わずに信じていた。天の神の厳命が出されたのである。神の言葉に誤りはあり得なかった。エリヤは自分の生命の危険をもかえりみずに、恐れることなく、彼の任務を果たしたのである。(国と指導者上巻87-90)

乏しい食物を分けあう

「エリヤは彼女に言った、『恐れるにはおよばない。行って、あなたが言ったとおりにしなさい。しかしまず、それでわたしのために小さいパンを、一つ作って持ってきなさい。その後、あなたと、あなたの子供のために作りなさい。「主が雨を地のおもてに降らす日まで、かめの粉は尽きず、びんの油は絶えない」とイスラエルの神、主が言われるからです』。」(列王記上 17:13, 14)

この女はイスラエル人ではなかった。彼女は神の選民が享受した特権と祝福を受けたことはなかった。しかし、彼女は真の神を信じ、彼女の道を照らしたすべての光に従って歩いていた。そこで、イスラエルの地にエリヤが安心して住むところがなくなったときに、神はエリヤを彼女の家に送り、そこに避難させられた。......

飢饉はこの貧困にうちひしがれた家庭をきびしく傷めつけ、哀れにも乏しい食糧はなくなりかけていた。やもめ女が生きるための戦いをやめなければならないと思ったその時に、エリヤがやって来たことは、なくてならぬものを備えて下さるという、彼女の生ける神の力を信じる信仰に対する最大の試練であった。しかし、彼女は貧窮の極に達していても、彼女の最後の食事を分けてほしいと願う旅人の要求に応じて、彼女の信仰のあかしを立てたのである。……

これ以上に大きな信仰のテストを要求することはできなかった。やもめ女は、これまで、すべての旅人を親切に手厚くもてなしたのであった。今、彼女は、自分と子供が苦しみに会うことをも顧みず、イスラエルの神が彼女のすべての必要を満たしてくださることを信じて、「エリヤが言ったとおりに」行い、旅人をもてなすことについてのこの最高のテストに耐えたのである。……

ザレパテのやもめ女は、彼女の乏しい食物をエリヤに分け与えた。そして、その返礼として、彼女と彼女の息子の生命が保護されたのである。そして、試練と欠乏のときに、われわれよりさらに困窮状態にある人々に同情と援助を与えるすべての者に、神は大きな祝福を約束しておられる。(国と指導者上巻 97-99)

飢餓の時にエリヤを養われた神は献身しているご自分の子らの一人を見捨てられることはない。その髪の毛までも数えておられるお方は、彼らを養われ、飢餓の時に彼らは満たされるのである。悪人たちが彼らの周りで、食物の欠乏のゆえに滅んでいく間、彼らのパンと水は保証される。(教会への証1巻173,174)

与える方が幸い

「わたしの神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、 キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう。」(ピリピ 4:19)

ザレパテのやもめの女についての話を読みなさい。異邦の地に住むこの女の所に、神は食物を求めるようにと、ご自分の僕を飢きんの時に送られた。……このフェニキヤの女が神の預言者に示した親切なもてなしは素晴らしいものであった。そしてその信仰と物惜しみをしない行為は驚くほど報いられたのである。

神は変わってはおられない。そのみ力は今もエリヤの時代と同じである。…… キリストのみ言葉は、その初めの弟子たちへと同様、今日の忠実な僕にむかって も、「あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け 入れる者は、わたしをおつかわしになったかたを受け入れるのである」と仰せに なる (マタイ 10:40)。キリストのみ名のゆえに示された親切な行為は必ず覚えら れ、報われる。そしてキリストは、神の家族のうちで最も弱々しく地位の低い者 であっても、同じに優しく覚えてくださるのである。「わたしの弟子であるという名 のゆえに、この小さい者」、すなわちその信仰とキリストを知る知識が子供のよう である者たち「の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる者は、よく言っておくが、 決してその報いからもれることはない」と仰せになる (同 10:42)。

貧困が、わたしたちが親切な行為をすることを妨げる必要はない。わたしたちは持っているものを分け与えるべきである。 暮らしをたてるのに苦労している人々、またその必要を満たす収入を得るのが非常に困難な人々がいる。しかし、この人々は主の聖徒の中のイエスを愛して、信者にも未信者にも、彼らの訪問を有益なものにしようとして、親切な行為を示す準備ができている。家庭の食卓で、また家庭の祭壇で訪問客は歓迎される。祈りの時間は、もてなしを受け入れる人々に感銘を与える。そしてただ一度の訪問でも死から魂を救う機会になることができるのである。この働きのために主は、「わたしが報いる」と仰せになって、清算されるからである。……

「人はパンだけで生きるものではな」い。だからわたしたちは この世の食物を他の人々に分け与えるように、希望と勇気とキリストのような愛を分け与えるべきである。……そう すれば「神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ちたらせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである」との保証はわたしたちのものである (コリント第二 9:8)。(教会への証 6 巻 345-348)

アハブの前に立つエリヤ

「彼は答えた、『わたしがイスラエルを悩ますのではありません。あなたと、あなたの父の家が悩ましたのです。あなたがたが主の命令を捨て、バアルに従ったためです』。」(列王記上18:18)

長年のかんばつと飢饉の間、エリヤは、イスラエルの人々が偶像礼拝を離れて神に忠誠をつくすように、熱心に祈っていた。主のみ手が、災禍に苦しむ地上に置かれていた間、預言者エリヤは忍耐強く待っていた。……

ついに、「多くの日を経て」、「行って、あなたの身をアハブに示しなさい。わたしは雨を地に降らせる」という主の言葉がエリヤに臨んだ。……

王と預言者はたがいに面と向かい合って立っている。アハブは激しい憎しみを抱いているにもかかわらず、エリヤの前では、女々しく、力がぬけたように思われる。彼は、まず、どもりながら、「イスラエルを悩ます者よ、あなたはここにいるのですか」と言い、無意識のうちに、彼の心の奥にひそむ感情をあらわすのである。アハブは、天が青銅のようになったのは、神の言葉によるものであったことを知ってはいたが、それでもなお、彼は、地に下った厳しい刑罰の責任を預言者に負わせようとしていたのである。……

エリヤは自分の潔白なことを意識して、アハブの前に立ち、自分を弁解しようとも、また、王にへつらおうともしないのである。また、かんばつは、ほとんど終わったというよい知らせによって、王の怒りを避けようともしないのである。彼は何の謝罪もしないのである。彼はいきどおりと神のみ栄えのための熱意に燃えて、アハブの告発を彼に帰して、この恐ろしい災害をイスラエルにもたらしたのは、彼の罪であり、彼の先祖の罪であると、恐れることなく王に宣言するのである。……

今日、断固とした譴責の声が必要である。なぜならば、悲しむべき罪が、人々を神から引き離したからである。……よく聞く耳ざわりのよい説教は、心に永続的印象を与えない。ラッパは音をはっきり出さない。人々は、神の言葉の明白で鋭い真理によって、心が切り裂かれない。……

神は、エリヤ、ナタン、バプテスマのヨハネのような人々、すなわち、結果がどうなろうとも、忠実に神の言葉を伝える人々を召しておられる。また、所有するすべてのものを犠牲にすることを要求されても、勇敢に真理を語る人々を、神は召しておられるのである。(国と指導者上巻 100 – 111)

神の勇士たち

「あなたがたはいつまで二つのものの間に迷っているのですか。主が神ならば それに従いなさい。しかしバアルが神ならば、それに従いなさい。」(列王記上 18:21)

全体的な背教のただ中で、エリヤは自分が天におられる神に仕えているという事実を隠そうとしなかった。バアルの預言者は 450 人を数え、祭司は 400 人、そしてその礼拝者は何千人もいた。しかしエリヤは、自分が人気のある側にいるように見せようとはしなかった。彼はただ一人で威厳をもって立った。……はっきりとした、トランペットのような声で、エリヤはおびただしい群衆に向かって、「あなたがたはいつまで二つのものの間に迷っているのですか」と話しかけるのである。……今日のエリヤはどこにいるのであろうか。(教会への証 5 巻 526, 527)

神は人々の前で至高者としてのご自分の栄誉が高められ、また神の勧告が確認されるのを望まれる。カルメル山での預言者エリヤの証は、地上において、神と神の働きのために毅然と立った人の模範となっている。……「イスラエルでは、あなたが神であること、わたしがあなたのしもべであって、あなたの言葉に従ってこのすべての事を行ったことを今日知らせて下さい。主よわたしに答えて下さい。わたしに答えてください。」と彼は祈り嘆願する。……

神の栄光のためという彼の熱意とイスラエルの家のための深い愛は、今日地上における神の働きの代表者として立つすべての人々のために教訓を与えている。 (SDA パイプル・コメンタリ [E・G・ホワイト・コメント] 2巻1034)

わたしたちが神の戒めを守る民であるということが知られるのを恐れたり、臆病であることによっては何も得られない。自分の信仰が恥ずかしいものであるかのように、わたしたちの光を隠すなら、結果として不幸が生じるだけである。神は、わたしたちが弱いままにしておかれる。主がわたしたちを召されるどのような場所においても、自分の光を輝かせるのをわたしたちが拒むことのないよう、主が助けて下さるようにと祈る。もしわたしたちが自分自身の考えや計画に従って、あえて自分自身を前に押し出し、イエスを後に残そうとするなら、堅忍や勇気、また霊的活力を得ようと期待しても無駄である。神は道徳上の勇士、すなわち神の特別の民であることを恥としない人々を持っておられたし、今も持っておられる。彼らの意志と計画はすべて神の律法に従ったものである。イエスの愛は彼らに自分の生命を大事なものと考えないよう導いてきた。彼らの働きは神のみ言葉からの光を捕え、世にはっきりとした変わらない光線を輝き出させるようにしてきた。「神への忠誠」が彼らのモットーである。(教会への証5巻527,528)

過去と現在の偶像礼拝

「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。」(出エジプト 20:3)

形こそ違うが、偶像崇拝は、今日のキリスト教界にも、古代イスラエルのエリヤの時代にあったのと同じように存在している。自ら賢人と称する多くの人々、哲学者、詩人、政治家、ジャーナリストたちの神、洗練された上流社会、多くの大学、はては幾つかの神学校などの神も、フェニキヤの太陽神バアルとほとんど変わるところがない。

キリスト教界で受け入れられている誤謬ほど、天の神の権威に大胆に打撃を与えるものはなく、また、神の律法はもはや人間を拘束しないという、急速に力を増しつつある近代的教理ほど、結果の有害なものはない。……

聖書はどんな人の手にも入るが、それを真に人生の道しるべとして受け入れる人は少ない。不信仰は単に世の中ばかりでなく、教会内にも驚くほど広くゆきわたっている。多くの人は、キリスト教信仰の支柱そのものになっている教理を否定するようにさえなっている。霊感を受けた記者たちによって書かれている、創造の偉大な事実、人類の堕落、贖い、神の律法の永遠性などの大真理が、自称キリスト教界の大部分の人たちによって、全体的に、あるいは部分的に受け入れられなくなっている。知恵と自主性を誇る幾千もの人々が、聖書に絶対的信頼を置くことを弱さの証拠と考え、聖書の揚げ足を取ったり、最も重要な真理を抽象化したり言い抜けたりすることを、優れた才能や学識の証拠だと思っている。神の律法が変更されたとか廃されたとかいうことを、信者たちに教えている牧師や、学生たちに教えている教授、教師が多い。そして、律法の要求がなお有効であり、字義通りに従わなければならないものであるとみなす人々は、嘲笑と侮べつにしか値しないと思われている。……

真理と誤謬の最後の大争闘は、長い間続いてきた神の律法に関する論争の最後の戦いにほかならない。われわれは今や、この戦い、……に入っているのである。(各時代の大争闘下巻345,344)

神を待ち望む

「エリヤはアハブに言った、『大雨の音がするから、上って行って、食い飲みしなさい』。」(列王記上 18:41)

エリヤがこのような確信をもってアハブに雨の準備をするように命じたのは、雨が降りそうな外面的証拠が何かあったためではなかった。エリヤは空に雲を見なかった。雷の音も聞かなかった。彼はただ彼自身の強い信仰に答えて、主の霊が彼を動かして語らせられた言葉を語ったに過ぎなかった。……彼は力のなし得る限りのことをなし終えた。そこで彼は、天の神が預言された祝福を豊かにお与えになることを知っていた。かんばつをお与えになった同じ神が、正しい行為の報いとして豊かな雨を約束されたのである。そしてエリヤは今、約束された雨が注がれるのを待った。彼は「顔をひざの間に入れ」て謙遜な態度をとり、悔い改めたイスラエルのために、神にとりなしの祈りを捧げた。……

しもべは、青銅のような空には雨の降るしるしは何もないと言って6回も帰ってきた。 エリヤは臆することなく、もう1度彼を送り出した。するとしもべは、今度は帰ってきて「海から人の手ほどの小さな雲が起っています」と言った。

これで十分であった。エリヤは空が暗くなるまで待たなかった。彼は信仰によって、その小さな雲のなかにあふるるばかりの雨を見た。そして彼は、その信仰に従って行動した。……

彼は祈り、信仰の手をのばして天の神の約束をつかんだ、そして彼は祈りが聞かれるまで祈りつづけた。彼は神が祈りをお聞きになったという十分な証拠が与えられるまで待たず神の恵みのほんのわずかなしるしにすべてをかけるのであった。しかし彼が神の助けによってなし得たことは、すべての者がそれぞれの神の奉仕における範囲内においてなし得ることなのである。……

このような信仰、すなわち、神のみ言葉の約束をつかんで、天の神がお聞きになるまで、どんなことがあっても手を離さない信仰が、今日世界に必要である。......

われわれはヤコブの不撓不屈の信仰、エリヤのたゆまぬ忍耐力とをもって、われわれの願いを天の父に申し上げ、彼が約束されたすべてのことを自分のものとすればよいのである。神はそのみ座の名誉にかけて、ご自分のみ言葉を成就してくださるのである。……(国と指導者上巻 123 – 125)

自己を明け渡す

「エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかった。それから、ふたたび祈ったところ、天は雨を降らせ、地はその実をみのらせた。」(ヤコブ 5:17, 18)

エリヤの経験の中で、重要な教訓がわたしたちに与えられている。カルメル山上で彼が雨のために祈りをささげた時、彼の信仰は試されたが、神に彼の要求を訴えて頑張り通した。……彼が六回で落胆してあきらめたならば、彼の祈は答えられなかったであろう。しかし、彼は答えが来るまで忍耐強くやり通した。わたしたちには、わたしたちの嘆願に耳を閉じられることのない神がおられる。だからもしわたしたちが「神のみ言葉を証明するならば、神はわたしたちの信仰に光栄を与えられるであろう。神はわたしたちがすべての関心を神の心と織り合せることを望まれる。なぜなら、祝福がわたしたちのものとなる時、わたしたちは自分の栄誉としないで、神にあらゆる賞賛を帰すようになるからである。神は、いつもわたしたちの祈りに最初から答えられるとは限らない。なぜなら、もしそうなったら、わたしたちは神がお与えになったあらゆる祝福と恩恵を受ける権利を当然の事と思うからである。自分が何かの悪をもてあそんだり、罪にふけっていないかどうかを吟味するためにじっくり考えることをしないで、わたしたちは不注意になって、神に信頼することと神の助けの必要性を真に理解しなくなるのである。

エリヤは、自分に栄誉を帰すことがないという状態まで、自分自身を謙虚にした。これが、主が祈りを聞かれる状態である。なぜなら、その時わたしたちは主をほめたたえるからである。人間に賞賛を捧げる慣習は、大きな害悪という結果を産む。一方が他者を賞賛する。このようにして人々は、栄光と名誉が彼らに属すると感じるようになる。あなたが人を高めるとき、まさにサタンがあなたにするように、あなたは彼の魂に罠を仕掛けるのである。……神だけが賞賛されるにふさわしい方である。(SDA パイプル・コメンウリ [E・G・ホワイト・コメント]2 巻 1034, 1035)

彼(エリヤ)が自分の心を探ったとき、自分自身の評価と神の御前の両方において、ますます自分が小さく思えた。彼にとって自分は無であり、神がすべてであると思えた。そして、彼が自己放棄の点に達し、また自分の唯一の力と義として救い主にすがりついたときに応答がきた。(同上 1035)

落胆に圧倒される

「[彼は] 自分の死を求めて言った、『主よ、もはや、じゅうぶんです。今わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません』。」(列王記上19:4)

あのように不屈の勇気を示し、国王や祭司たちや国民に対してあのように完全な勝利を収めたエリヤは、その後落胆したり、おじ気づいたりすることはあり得ないかのように思われる。しかし、このように多くの神の愛の保護の証拠を与えられた彼も、人間的弱さに勝つことができず、この暗黒の時に信仰と勇気を失ってしまった。……

彼がその場にとどまり、神を彼の避け所、また力として真理のために固く立ったならば、彼は危害を受けることなく守られたことであろう。主はイゼベルに刑罰をお与えになって、もう一つの著しい勝利をお与えになったことであろう。……

だれでも時には、激しい失望と絶望に陥る時があって、心は悲しみに満たされ、神が今でも地上の子供たちの慈悲深い保護者であられることを信じ難い日々があるものである。心は悩みにさいなまれて生きているよりは死んだほうがましだと思われる時がある。そうした時に多くの者は、神に対する信頼を失って、疑いと不信の奴隷になるのである。そのような時に、もしわれわれが霊的洞察力をもって、神の摂理の意味を悟ることができたならば、天使たちがわれわれを助けて、われわれの足を永遠の山よりも堅い基礎の上に置こうと努めているのを見ることができるであろう。そして、新しい信仰と新しい生命がわき上がることであろう。……

気落ちしている者に対して、信頼できる救済策がある。それは信仰と祈りと行いである。……一見絶望的で、最悪の事態にあっても恐れてはならない。神を信じよう。神はあなたの必要を知っておられる。神はすべての力を持っておられる。神の無限の愛と憐れみは、消耗することがない。……そして神は、忠実なしもべたちが必要とするだけの能力をお与えになる。……

神はエリヤを、試練の時にお捨てになったであろうか。いや、そうではない。神はエリヤの祈りに答えて、天から火を降らせて山の頂を照らされた時と同様に、彼が神と人に捨てられたと感じた時にも、彼を愛しておられた。(国と指導者上巻 127-135)

あなたはここでなにをしているのか

「その所で彼はほら穴にはいって、そこに宿ったが、主の言葉が彼に臨んで、彼に言われた、『エリヤよ、あなたはここで何をしているのか』。」(列王記上 19:9)

エリヤがホレブ山に隠れたことは、人間にはわからなかったが、神は知っておられた。そして疲労し、絶望に陥った預言者はそこにただ一人残されて、押し寄せる悪の勢力と戦うのではなかった。……

神は疲れたしもべに、「あなたはここで何をしているのか」とおたずねになった。私はあなたをケリテ川に送り、その次にはザレパテのやもめのところに送った。 私はあなたにイスラエルに帰って、カルメル山上で偶像礼拝の祭司たちの前に立つことを命じた。そして、王の車をエズレルの門まで導く力をあなたに与えた。しかしこんなにあわててあなたを荒野に逃亡させたのは、いったいだれなのか、あなたはここで何の用があるのか。……

真実で忠実な人々のたゆまぬ活動に負うところが多いのである。そのためにサタンは、服従する人々によって行われる神のみこころを、なんとかして妨げようと努力するのである。サタンはある者に、彼らの崇高で聖なる任務を見失わせて、この世の快楽に満足を味わわせようとする。……また他の人々を、反対や迫害のゆえに失望させて、義務を行うことを回避させる。……魂の敵によってその声を沈黙させられたすべての神の子に対して、「あなたはここで何をしているのか」という質問が投げかけられている。わたしはあなたに、全世界に出て行って福音を宣べ伝え、人々に神の日のための備えをさせるように任命したのである。あなたは、なぜここにいるのか。……

個人と同様に家族に対しても、「あなたはここで何をしているのか」という質問がなされている。多くの教会の中には、神のみ言葉の真理についてよく教えられた家族がある。そのような人々は、彼らのできる奉仕を必要としている場所へ移っていって、彼らの影響力の範囲を広げるとよいのである。神はキリスト者の家族が、地上の暗黒の場所へ出ていって、霊的暗黒に閉ざされている人々のために、賢く忍耐強く働くように招いておられる。……世俗的利益のためや科学的知識獲得のために、人々は喜んで伝染病の多い地域へ入って行って、苦難と欠乏とに耐えるのである。救い主のことを他の人々に伝えるために喜んでそれと同じことをする人々がどこにいるのであろうか。(国と指導者上巻 136 – 141)

今日必要とされるエリヤ

「また、わたしはイスラエルのうちに七千人を残すであろう。皆バアルにひざをかがめず、それに口づけしない者である。」(列王記 J: 19:18)

エリヤはイスラエルの中で、自分だけが真の神の礼拝者であると考えていた。 しかしすべての人々の心を読まれる神は、長くつづいた背信のなかにあって神に 忠誠を保った者が多くいたことをエリヤに示された。……

一見、失望と敗北と思われる時におけるエリヤの経験から多くの教訓を学ぶことができる。すなわち、人々が一般に正義から離反している、現代の神のしもべたちに非常に貴重な教訓を教えている。今日広く行きわたっている背信は、預言者の時代にイスラエルに広がった背信とよく似ている。今日多くの人々は神よりも人間を高め人気ある指導者を称賛し、富を礼拝し、啓示の真理よりも科学を尊重してバアルに従っている。疑惑と不信は人々の心に悪影響を及ぼし、多くの者は人間の理論を神の言葉の代わりにしている。彼らは、人間の理性が神の言葉の教え以上に高められるべき時が来たと、公然と教えている。義の標準である神の律法は、もうその効力を失ったと言われている。すべての真理の敵は欺瞞的な力をもって働きかけ、神の占めるべき位置に人間の制度を設け、人類の幸福と救いのために定められたものを彼らに忘れさせようとしている。

しかしこの背信は、広がっているとは言っても、普遍的なものではない。世界中のすべての人が不法で罪深いのではない。すべての者が敵の側に加担したのではない。神は、……イエスが速やかに来られて、罪と死の支配を終わらせてくださることを切望している者を多く持っておられる。……

このような人々は、神を知り、神のみ言葉の力を知った人々の個人的な援助を必要としている。……聖書の真理を知っている者が、光を熱望する男女をたずね求める時に、神の天使は彼らに伴っていく。……多くの人々が偶像礼拝から生きた神の礼拝に立ち返るのである。多くの人々は人間が作った制度を崇敬することをやめて、恐れることなく神と神の律法の側に立つのである。(国と指導者上巻 139, 140)

弱いその時

「彼は言った、『わたしは万軍の神、主のために非常に熱心でありました。イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、刀であなたの預言者たちを殺したからです。ただわたしだけ残りましたが、彼らはわたしの命を取ろうとしています』。」(列王記上 19:14)

もし霊的力に満ちた人が、困難な状況のもとで極度の苦しみに遭い、失望落 胆して生きがいを全く見失ってしまったとしても、これは不思議でも新しいことで もないのである。そうした人々はみな、最大の預言者の一人が、激怒する女の怒 りを避けて命からがら逃げ出したことを思い出すとよい。……

自分たちの生命のエネルギーを自己犠牲的働きのために使い尽くしながらも、 落胆と疑惑に打ちひしがれそうになる者は、エリヤの経験から勇気を得るとよい。 ……

サタンが最も激烈な攻撃をしてくるのは、魂が最も弱っている時である。…… かんばつと飢饉の年月の間主に信頼しつづけ、恐れることなくアハブの前に立ち、カルメル山上におけるあの試練の日に、イスラエル全国民の前に真の神のただ一人の証人として立った彼が、疲れ果てた時には死の恐怖に襲われて、彼の神に対する信仰を失ってしまった。……

……われわれも疑惑に襲われ、窮地に陥り、貧苦に悩むとき、サタンはわれ われの主に対する確信を動揺させようとするのである。……

しかし神は理解し、なお憐れみ、愛されるのである。神は心の動機と目的とをお読みになる。万事が暗澹としている時に、忍耐強く待ち信頼することは、神の働きの指導者たちが学ばなければならない教訓である。神は逆境の中にある彼らをお見捨てにならない。自分の無価値なことを知って全く神に寄り頼む魂ほど、一見無力に見えるが、真にこれほどに打ち勝つことができないものはほかにないのである。

試練の時に神に信頼することを改めて学ぶというエリヤの経験の教訓は、大きな責任の地位にある人々のためだけではない。エリヤの力であられたお方は、どんなに弱い者であっても、苦闘する神のすべての子供を支える力を持っておられる。神はすべての者に忠誠をお求めになり、すべての者に必要な力をお授けになるのである。(国と指導者上巻 141 – 143)

戦いは神のもの

「われわれの神よ、あなたは彼らをさばかれないのですか。われわれはこのよう に攻めて来る大軍に当る力がなく、またいかになすべきかを知りません。ただ、あ なたを仰ぎ望むのみです。」(歴代志下 20:12)

ヨシャパテの治世の晩年においてユダ王国は敵軍の侵略を受け、地の住民は それを前にして震えおののいた。……

ヨシャパテは勇猛果敢な人であった。彼は永年にわたって、軍隊と要害の町々を強化してきた。彼はどんな敵にも対応する準備が整っていた。しかし彼はこの危機において、肉の腕に頼らなかった。彼は訓練された軍隊や城壁をめぐらした町々ではなくて、イスラエルの神に対する生きた信仰によって諸国民の前で、ユダを辱めようとして力を誇示するこれらの異教徒に勝とうと望んだのである。

「そこでヨシャパテは恐れ、主に顔を向けて助けを求め、ユダ全国に断食をふれさせた。それでユダはこぞって集まり、主の助けを求めた。すなわちユダのすべての町から人々が来て主を求めた」。

ヨシャパテは人々の前で、神殿の庭に立って心を注ぎ出して祈り、イスラエルの無力さを告白して神の約束を願い求めた。

ヨシャパテは確信をもって、「ただあなたを仰ぎ望むのみです」と言うことができた。彼はむかし神の選民を全滅から救うために度々介入された神に信頼するように、永年にわたって人々を教えてきた。そして今、王国が危機にひんしたときに、ヨシャパテはただひとりで立ったのではなかった。「ユダの人々はその幼な子、その妻、および子供たちと共に皆主の前に立っていた」(歴代志下 20:13)。彼らは一つになって断食して祈った。彼らは一つになって、主が彼らの敵を混乱させ、主のみ名があがめられるように願い求めたのである。……

神はこの危機においてユダの避け所であられたが、今日も神の民の避け所であられる。われわれはもろもろの君たちに頼ったり、人間を神の位置に立てたりしてはならないのである。われわれは、人間は倒れ、誤りを犯すものであることと、全能の神がわれわれの力強い防御のとりでであることを忘れてはならない。あらゆる危機において、戦いは神のものであると思わなければならない。神の資源は無限である。そしていかにも不可能と思われる事態は、それだけ勝利を大いなるものにするのである。(国と指導者上巻 164 – 169)

戦いの歌

「彼はまた民と相談して人々を任命し、主に対する聖潔の美を賛美させ、軍勢の前に進ませ、主に向かって歌をうたい、かつさんびさせ、『主に感謝せよ、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない』と言わせた。」(歴代志下 20:21 英語訳)

歌を歌って主を賛美し、イスラエルの神をあがめながら敵軍に向かっていくというのは、奇妙な方法であった。これは彼らの戦いの歌であった。彼らは聖なる飾りを身に着けていた。もしわれわれが、今もっと神を賛美するならば、希望と勇気と信仰が増しつづけることであろう。そしてこれは、今日真理を擁護して立っている勇敢な兵士たちを奮起させるのではなかろうか。(国と指導者上巻 168)

彼らは勝利を求めて神を賛美した。そして四日後に敵の分捕り品を積み上げ、 勝利のゆえに賛美の歌を歌いつつ、軍勢はエルサレムに戻ってきた。(神の息子、 娘たち7月11日)

わたしたちが神の憐れみと慈愛について、より深い感謝の心を持つ時、つぶやく代りにこのお方を讃美していることであろう。主の愛に満ちた見守りについて、良い羊飼いである方の優しいあわれみについて語ることであろう。心から出る言葉は利己的なつぶやきや愚痴ではなくなる。透き通った流れのような讃美が、真に神を信じる者たちから出てくるのである。

人生の旅路において霊的歌声をあげようではないか。……わたしたちは神のみ言葉を研究し、瞑想と祈りをする必要がある。そうすればわたしたちは天にある宮の奥殿をはっきり と見る霊的視力を持ち、み座の周りにいる天の聖歌隊によって歌われる感謝のしらべを捕えるのである。シオンが起きて光を放つとき、その光は最もよく輝きわたり、讃美と感謝の歌が聖徒たちの集会の中で聞こえる。ささいな失望や困難は忘れ去られるのである。

主はわたしたちの助け手であられる。……神に信頼して徒労に終った者はいない。このお方は、ご自分に寄り頼む者たちを決して失望させられない。主がわたしたちに望んでおられる働きを、イエスの足跡をたどりつつ行いさえすれば、わたしたちの心は聖なる立琴となり、そのすべての弦は世の罪を取り除くために神が送られたお方に向かって讃美と感謝を発するのである。(同上7月10日)

研究 6 わたしたちが信仰の一致に到達するまで



これまで、いのちの目的について、すなわち目的とそこに至るまでの過程の 違い、また目的の重要性を見てきました。それでは、わたしたちのいのちの目的は、 何でしょうか。

2. わたしたちすべての者が…目的

目的:信仰の一致 知識の一致

これが目的です。なぜなら、イエスご自身、このように祈っておられるからです。

「父よ、それは、<u>あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように</u>、みんなの者が<u>一つとなるため</u>であります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせる<u>ため</u>であり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになる<u>ため</u>であります。」(ヨハネ 17:21)

ここでみんなの者と言われているのは、聖霊の賜物を受けた人々です。

そして彼らに対して、御父と御子は、「あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように」「一つに」と言われます。わたしたちが個々の存在であるように、御父と御子も個々の存在であられますが、ちょうど夫婦一体(エペソ5:31参照)というように、一体になって生きるということです。すなわち、思いと目的が一つであるため、一致しているということです。

これを成就するのが、「神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致」 であり、「あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいる」ことです。 そして、これは目的であり、また方法でもあるのです。 ですから、「神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致」(エペソ 4:13)は、「世が信じるようになるため」、すなわち、ヨハネ 3 章 16 節の「それ は御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るため」という約束が成 就するためです。世が信じるようになるのは、「彼らをもわたしたちのうちにおらせ」「みんなの者が一つになる」ことによってですから、その一致に至らせることが目 的になります。そして、これを成就するために、聖霊の賜物を与えて下さいました。 なぜなら、「働きは種々あるが」「一つの御霊によって、一つのからだとなる」からです (コリント第一12 章)。

またこのお方は続けて言われます、「わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります」(ヨハネ17:22)。

このお方は、弟子たちが一つになるために神の栄光を与えて下さいました。 ここで、順番を見てみましょう。

- 1. わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。
- 2. それは、<u>わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるため</u>であります。…あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、 …彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、
- 3. <u>それによって</u>、あなたがわたしをおつかわしになったことを、<u>世が信じる</u> ようになるためであります。

そしてこのお方は、弟子たちが一つになるために、神より受けた栄光を与えてくださいました。どのようにでしょうか。

「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ」(ヨハネ 13:15)。

だれが一番偉いかという世の栄光にとらわれている弟子たちに、このお方はご自分の手本によって、静かに神の栄光を見せてくださいました。その時、イエスはご自分を売る者の足を洗って下さいました。これは洗足式ではありません。式典ではなく、実際に足を洗って下さったのです。今日の弟子たちはどうでしょうか。洗足式はためらわずに行っても、普段は「足を洗いたくない」場合が多くはないでしょうか。

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わた

しがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」(ヨハネ13:34,35)。

このお方の栄光が与えられる、すなわちこのお方のご品性が弟子たちのうちに 再現されるとは、どういうことでしょうか。「イエスはさらに進んで、神の戒めを 守るとはどういうことか、すなわちそれはキリストのご品性を自分たちのうちに再 現することであることを聴衆にお教えになった。なぜなら、神はキリストにおいて、 日々彼らの前に表されていたからである」(祝福の山 68)。

このお方は神の戒め、すなわち神のご品性を拡大して、見せて下さいました。マタイ5章から7章では、神のご品性がよりはっきり示されています。それによって神の栄光を与えて下さったのです。なぜなら、神の戒めは、「神の意志の啓示、神のご品性の写し、神の愛と知恵の表現」だからです(人類のあけぼの上巻38)。ですから、神の律法が明確にならない限り、一致はあり得ません。

「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、『取って食べよ、これはわたしのからだである』。また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、『みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である』。」(マタイ 26:26-28)。

イエスは、ご自分の体なる教会が一つになるために、ご自分の体を与えて下さいました。すなわち、「神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致」に至るために、無限の代価が支払われたのです。この代価を考える人々が一つになります。

「改心はほとんどの者が喜ばない働きである。世的な罪を愛する思いを改変し、この思いに、言語に絶するキリストの愛、このお方の恵みの魅力、神の麗しさを理解させて、それによって魂が神の愛に染められ、天の奥義に魅了されるというのは、決して小さいことではない。彼がこれらの事柄を理解するとき、彼にとって以前の生活は実に嫌な憎むべきものに見えるようになる。彼は罪を憎み、神の御前に心を砕いて、キリストを魂の生命、喜びとして受け入れる。彼は自分の以前の楽しみを捨てる。彼は新しい思い、新しい愛情、新しい興味、新しい意志を持つ。彼の悲しみ、彼の願いと愛はまったく新しくなる。これまでむしろキリストより好んでいた肉の欲、目の欲、持ち物の誇りは、今や捨てられ、キリ

ストが彼の人生の魅力、喜びの冠となる。かつては何の魅力もなかった天国は、 その富と栄光のうちに眺められる。そして彼は、そこで自分を贖ってくださったお 方を見、愛し、讃美することになる天国を自分の未来の家庭としてじっと見つめる。

かつてはうんざりするように見えた、聖潔の働きは、今は彼の喜びとなる。退 屈で興味のなかった神の御言葉が、今は彼の研究の対象、相談相手として選ばれる。それは永遠のお方の文字を刻んだ神からの彼にあてた手紙である。彼の思想、彼の言葉と行いはこの基準に合わされ、試される。彼は御言葉の中に含まれている命令と威嚇に恐れおののくと同時に、その約束を把握し、それを自分に適用して、自分の魂を強める。今は彼によって最も信心深い者の社会が選ばれ、以前彼がその交際を愛していた悪を彼はもはや楽しまなくなる。彼は、かつて自分が笑っていた罪を嘆き悲しむ。自己愛と虚栄心は捨てられ、彼は神に生き、良いわざに富む。これが、神が要求なさる聖化である。このお方はこれ以外の何ものもお受け入れにならない」(教会への証二巻 294, 295)。

MEMO

で、ニコデモはイエスさまの体のために百斤ほどの没薬と沈香の高価な贈り物をもってきました。

エルサレム中のどんなえらい人でも、死に際してこれほどの尊敬を受けることはできなかったことでしょう。イエスさまのつつましい弟子たちは、これらの裕福な役人たちが自分たちの主の埋葬にこのような関心を示すことを驚いて見ていました。

弟子たちはキリストの死の悲しみに圧倒されていました。彼らはこれらのことが起こるとキリストが言っておられたことを忘れていました。彼らには希望がありませんでした。ヨセフもニコデモも、救い主の在世中には公然と主を受けいれませんでした。しかし、彼らはこのお方の教えに耳を傾け、そしてこのお方の公生涯の一歩一歩を注意深く見守っていました。弟子たちはご自分の死を予告する救い主の言葉を忘れていましたが、ヨセフとニコデモはそれらをよく覚えていました。そして弟子たちを落胆させ、彼らの信仰を動揺させたイエスさまの死に関連した場面は、これらの役人たちにとっては、このお方が真のメシヤであられることを証明したにすぎませんでした。そして、このお方を信じる者としてしっかりと彼らの立場をとるように導いたのでした。

これらの裕福で高貴な身分の人たちの助けがこのとき、とても必要でした。彼らは死なれた自分たちの主のために貧しい弟子たちができないことをすることができました。

ていねいに、うやうやしく彼らは、自分たちの手でキリストのお体を十字架からおろしました。傷つき引き裂かれた主のお体を見たとき、同情の 涙が走り落ちました。

トマトと青じその冷製パスタ

材料 (2人分)

パスタ 2束

トマト 中2個

新タマネギ 1/4 個 (みじん切り) にんにく 2片分 (みじん切り)

青じそ 2 枚

オリーブオイル 大さじ2

レモン汁 小さじ 1/2

塩 適官

しょうゆ

昆布顆粒だし 2 g

- 1. トマトを皮付きのまま1cm 角位に切る。
- 2. フライパンにオリーブオイルを熱し、にんにくを入れ、弱火で香りが出るまでじっくり火を通す。

小さじ 1/4

- 3. フライパンにトマトを入れて、さっとひと混ぜしたら火を止め、ボウルに 移す。
- 4. トマトを入れたボウルの中に、みじん切りにした新タマネギ、レモン汁・ しょうゆ・塩・昆布顆粒だしを入れて混ぜ、冷蔵庫で冷やす。
- 5. パスタを所定の時間ゆで、ゆで上がったら冷水で冷ます。
- 6. ボウルのトマトソースとからめて、上に青じそをのせて、出来上がりです。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校:9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教:11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究:14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先:〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱13号「福音の宝」係 是非お申し込み下さい。



【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよ みもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全 に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムで す。



イエスの物語

第52話

ヨセフの墓の中に(1)

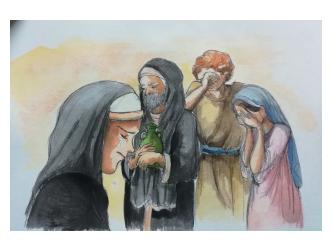
ローマ政府に対する反逆というのが救い主に対する有罪の宣告でした。 この理由で処刑された人たちはそのような犯罪者のための離れた場所に 葬られるのでした。

ヨハネは自分の愛する主のお体が冷酷な兵士たちの手で扱われ、不名 誉な墓に葬られるという考えに身ぶるいしました。しかしそれを防ぐ手だ てが見当たらず、ピラトに対して何の影響力も持っていませんでした。

この苦しいときに、ニコデモとアリマタヤのヨセフが弟子たちを助ける ためにやってきました。二人ともサンヒドリンの議員でピラトを知っていま した。二人とも富裕で影響力のある人たちでした。彼らは救い主のお体を 立派に埋葬しようと決心していました。

ヨセフは大胆にピラトのもとに行き、イエスさまの体を引き渡してほしいと頼みました。ピラトは、キリストが本当に死なれたことがわかってから、この要求を許可しました。

ヨセフが救い主のお体のためにピラトのもとに行っている間に、ニコデ



モはし死尊香布がた腐で埋た。の香共る慣れのい時体油にむでは一そのたった。

(43ページに続く)